

論文

社会福祉学における詩の可能性 —メビウスの輪としての詩—

Possibilities of Poetry for Studies of Social Welfare
— Poetry as a Mobius strip —

中村 剛*¹

要約：「科学」から零れ落ちてしまう現実の層がある。そこに「触れ」、言葉にする営みが文学である。本稿の目的は、文学の一形態である詩を通して、社会福祉学における文学の必要性を論証することである。まず、若松英輔『詩と出会う 詩と生きる』に触発され、詩の構造を「メビウスの輪としての詩の構造」として視覚化する(根拠1)。次に、その構造の具体例である石牟礼道子『苦海浄土』を取り上げる(根拠2)。これらにより、「詩は、①人間の厚み、深み、尊さを露わにする、②生きる意味(希望)を与える、③福祉の問題を他人事ではなく我が事と捉えることを可能にする」といった見解を導いた。そして、「①～③の働きがあるため、社会福祉学には詩が必要である」といった形で、社会福祉学における文学の可能性を明らかにした。

Key Words：社会福祉学、詩、普遍的なもの、若松英輔、石牟礼道子

1. はじめに

社会福祉は、さまざまな思いを胸に抱きながら生きる人と人との支え合いの営みである。その営みを理解するために社会福祉学がある。社会福祉学は主として意味解釈法を含めた科学によって社会福祉を理解しようとする。しかしながら、「科学」から零れ落ちてしまう現実の層がある。そこに「触れ」、それを言葉にするのが文学である。

社会福祉の深さ、重みのようなものを理解するためには、文学は不可欠である。このことは以下の先行研究で取り上げる論者をはじめ、何人かの人たちによって指摘されてきた。しかしながら、文学の本質を見極め、その観点から社会福祉学における詩の必要性を指摘した論文は見当たらない。ただし、文学の範囲は幅広い。よって本稿では、文学の一形態である詩に絞り、詩の本質という観点から、詩が社会福祉学には必要不可欠であることを明らかにする。これが本稿の目的である。

2章では、社会福祉と文学についての先行研究を整理した上で、本テーマにおける課題を指摘する。3章では、文学の一分野である詩に焦点を絞り、その本質について

1つの見解を示す。ここでは若松英輔の詩に対する考えを援用する。4章では、詩の本質を「図 メビウスの輪としての詩の構造」として視覚化した形で明らかにする。また、詩が見出す永遠・普遍的なものが衰退している状況を説明する。5章では、石牟礼道子の『苦海浄土』を取り上げ、詩の可能性について確認する。6章では、これまでの考察を根拠にして、社会福祉学における詩の必要性を明らかにする。

2. 社会福祉学と文学

2-1. 先行研究

(1) 人間の生への眼差し—小倉襄二—

小倉襄二は、巷で生きる一人ひとりの庶民の生、そこにある「無念の想い」や「暮らしに込めた願い」に対する理解を深めるために、「情報」とは次元を異にする「記憶」に着目する。その記憶とは「一人ひとりの生活、自分史のようなもの、日常性を含めてそれぞれの内奥に刻みこまれ、つまかさねられたもの、情念の働き」(小倉2006:18)といった類のものである。そして小倉はこのような記憶や想像力を触発し、ある内奥からのさまざまな記憶への共感を可能にするものとして文学作品を捉えている(小倉2006:18)。

2022年11月15日受付／2023年1月11日受理

*¹ NAKAMURA Takeshi

関西福祉大学 社会福祉学部

(2) 時代の状況を映し出す—小泉純一と遠藤興一—

小泉純一は、ディケンズの『オリバー・ツイスト』を取り上げ、そこに新救貧法が運用された19世紀前半の社会状況を読み取り（小泉 2000：90）、遠藤興一は、明治以後近代化が進むなかにおいて、社会福祉の歴史の変遷の後を、文学作品を素材とすることで「福祉の風景」とでも呼ぶべきものを描いている（遠藤 2019：153）。

これらに関連することとして思想家の内田樹は次のように述べている。

「例えば私たちが19世紀のロシア社会について知りたいと思うなら、勅令集やロシア政府の「経済白書」を読むより、『罪と罰』を読むことを選ぶでしょう。というのも、「勅令集」は「ロシア社会は何を許容するか」を主題的に論じており、ドストエフスキーのテキストは「ロシア社会は何を排除するか」を主題的に論じているからです」（内田 2007：146）

文学は歴史における「ある社会の状況」を、特に、排除された者を映し出す。

(3) 他者理解—小山聡子—

小山聡子は、対人援助における「受容」を、よりニュートラルな響きをもつ「他者理解」に言い換えている。その意味は「相手の言動が援助者としての自分の好みに合おうと合うまいと、現実に入りうることでありリアルに感じ、腑に落ちること」（小山 2014：45）である。この他者理解をめぐる大学の初学者向けの授業の中で、小説等文芸作品を取り上げている（小山 2014：61 - 62）。また、文学文芸作品の読み解きの理論的基盤としては、コンテキストによって意味は決定されるといった文学理論を紹介している（小山 2014：62）。

(4) 他者援助—ロバート H. プレムナー—

ロバート H. プレムナーは『Giving：Charity and Philanthropy in History』（邦題『社会福祉の歴史—文学を通して見た他者援助』）において、文学作品に描かれた慈悲深い行為や態度をまとめている（Bremner = 2003：4）。ここで言う文学作品とは、物語、詩、伝説、説教、小説、伝記、エッセイ、戯曲など多様である。ここでは一般的な施与と、貧者や乞食に対する施与に関して、著者や作品に登場する人物に関する考察や意見が述べられている（Bremner = 2003：1）。

(5) 当事者によって描かれた文学—荒井裕樹—

荒井裕樹は、障害者ならびにハンセン病患者といった

当事者が描いた文学を研究している。前者について荒井は次のように述べている。

「障害者の問題を中心的に扱う「社会福祉学」の領域においても、福祉制度や関連法、あるいは介護・就労・施設・教育などの問題が第一義的に扱われ、文学（に限らず文化・芸術活動一般）は、障害者を取り巻く切実な現実からは一線を画した問題として、暗黙の裡に副次的な事柄とされている感が否めない。

しかしながら、「学術・研究の世界で顧みられないこと」が、すなわち「実体として存在しないこと」を意味するわけでは決してない。……中略……戦後日本の障害者運動の中では、文学は決して周縁的・副次的な存在ではなく、人脈を繋ぎ、思想を錬磨していく上で、むしろ中心的な役割を果たしてきたとさえ言えるのである」（荒井 2011：7 - 8）。

2-2. 考察

荒井が言うように、社会福祉学において文学は副次的な事柄とされている印象を受ける。おそらくその主な理由は、社会福祉学を科学として確立しようとしているためであろう。そのようななか先行研究を見ると、社会福祉における文学の必要性は、①社会福祉の中にある人間に対する理解を深めることができる（人間の生への眼差し、他者理解、当事者によって描かれた文学）、②過去の状況や支援について理解することができる（時代の状況を映し出す、他者援助）、この2点にあると考えられる。

人間には科学では理解できない次元があり、そうしたものを言葉にしてきたのが文学や哲学、あるいは宗教である。しかしながら先行研究においては、こうした文学の本質に関する考察はない。よって以下では、文学の一形態である詩に絞り、その本質を明らかにすることで、社会福祉学に対する文学の可能性（必要性）を論証する。

3. 若松英輔『詩と出会う 詩と生きる』

ここでは若松英輔『詩と出会う 詩と生きる』（2019-a）を取り上げる。若松は詩の本質を、「永遠・普遍なものに触れ、それを言葉にする営み」と捉えている。これは詩の一つの捉え方・理解に過ぎないのかもしれない。しかしながら、「永遠・普遍的なものに触れる」という詩の捉え方は、詩や文学の本質として欠かせないものであり、社会福祉学における詩の必要性を説明し得るものと

考える。そのため、若松の考えを援用する。なお、()内の数字は引用ページである。

3-1. 詩の営み

(1) 永遠・普遍的なものに触れる／言葉を受け取る／悲しみの声を聴く

①「知ること」と「触れること」

私たちは物事の本質を定義によって知ろうとする。しかし、定義は制限することにより、その物事との交わりを扉を閉ざしてしまうことがある。例えば、美に触れたいと願うのであれば、美と直に触れ合う道を進まなくてはならない(19)。詩とは、世にある様々な人、物、出来事、想念、そして象徴を扉にしなが、その奥にあるものに触れようとする営みである(27)。

②永遠・普遍的なもの

詩が触れるものの1つが、永遠・普遍なるものである。それらはさまざまな言葉で表されてきた。たとえば、『方丈記』には、この世の無常・儚さが謳われているが、鴨長明は、刻一刻と変わりゆく「無常」を見ながら、その彼方にある「常」すなわち、永遠なるものを観ようとしていた(32-33)。この「常」を松尾芭蕉は「幽玄」と表現し、正岡子規がいう「写実」は、俳句を、「幽玄」を創作するのではなく(人間に「幽玄」は作り出すことはできない)、「幽玄」を発見する次元へと立ち返らせるものであった(72-73)。

③言葉を受け取る

リルケ(Rainer Maria Rilke)にとって詩を書くとは、永遠の世界と交わることであり、そこから託されたコトバといういのちを育て、言葉として世に送り出すことであった(230, 233)。詩を読んだ者が、過ぎ行くことのない何かを感じ得ること、それが詩の基盤だとリルケはいう(233)。またリルケは、芸術は言葉の彼方にあり、神秘的なもの、そのいのち—すなわち美のいのち—は、永遠なるものだとも語る。詩は人間のかたわらにあって、過ぎ行く肉体の奥に、けっして消えることのないものがあることを告げ知らせる(233)。

④悲しみの声を聴き、言葉にする

永遠・普遍的なもの次元で鳴り響いているものがある。それが悲しみの声である。そうした声を書き記したのが、28歳で、病で亡くなったブッシュ孝子の次の詩である。

暗やみの中で一人枕をぬらす夜は 息をひそめて 私

をよぶ無数の声に耳をすまそう

地の果てから 空の彼方から 遠い過去から ほのか
な未来から

夜の闇にこだまする無言のさけび あれはみんなお前
の仲間達

暗やみを一人さまよう者達の声 沈黙に一人耐える者
達の声

声も出さずに涙する者達の声(ブッシュ孝子 2020:
104)

悲嘆にくれ、人は部屋から出ることができないときも
ある。しかし、そのとき人は感情の世界において、悲し
みによって未知なる他者とつながっている、ということ
をこの詩は教えてくれる(177)。

(2) 人の想いを言葉にする

①他者の想い

夫が仕事で遠くにあるとき、妻は病に襲われ亡くなろ
うとしている。その時の、妻の気持ちを讀んだのが次の
歌である。

声をだに 聞かで別るる 魂よりも 亡き床に寝む
気ぞかなしき (よみ人しらず)

ここには、「あなたの声を聞くことができず逝こうと
している私よりも、私が逝ったあと、夜、独りで寝るあ
なたの悲しみの方がよほど耐え難いでしょうね」といっ
た思いが表されている(52)。万葉の時代の歌人は、自
分のおもいを歌にするだけでなく、人々の心において歌
になるのを待っている出来事を引き受ける役割を担って
いた(53)。

②自分の想い

自分の想いを詠んだ歌もある。岩崎航は1976年に仙
台で生まれている。彼は3歳ごろに発病、翌年に進行性
筋ジストロフィーと診断される。今も彼は日々、ベッド
の上で暮らし、言葉をつむいでいる。岩崎の父母が、苦
しみ、悲しむ彼に、掛ける言葉もなく、背中をさするほ
かないとき、彼は次のように詠んだ(151-153)。

何も言わずに さすってくれた 祈りを込めて さ
すってくれた
決して 忘れない (岩崎 2013: 79)

また、岩崎には次の歌もある。
ほく自身も 誰かの伴走者となって はじめて 完走
できると 思うのだ (岩崎 2013: 124)

人は、様々な状況の中で、切なる想い・願いを抱く。
そうしたものは地域や時代を超えた普遍的なものである。
そうしたものを言葉にするのが詩である。

3-2. 詩がもたらすもの

(1) 生きる意味 (たしかな光)

私たちが暮らしている移ろいゆく世界は、言葉によって語られる「言葉の世界」である。これに対して、批評家の小林秀雄は、その世界の奥に「意味の世界」があるという(98)。それは、「常」、「幽玄」といった言葉で表現されてきた永遠・普遍的な世界であろう。永遠・普遍的な世界は「意味の世界」であり、その世界に触れることで、「生きる意味」が理解される。「生きる意味」とは、生きることを肯定する理由のことである。

若松は「人は、詩を必要としている」、「詩は、時代が、また一人の人間が困難に直面したとき、ほのかな、しかし、たしかな光となってきました」(28 - 29)と述べている。その理由は、人は詩によって生きる意味を理解するからである。永遠・普遍的なもの、人の想いに触れることで、人は生きる意味を理解し、それが困難な状況における光となる。

(2) 他者とのつながり

① 悲しみを通じて他者とつながっている

詩は、目に見えない涙と声にならない呻きを言葉にする。ブッシュ孝子の詩が露わにしているように、深い悲しみの中にある者は、悲しみを通して他者の声を聴き、他者とつながることができる。若松は、このことを「悲しみの意味と嘆きの理(ことわり)」と表現する(若松 2020: 151 - 152)。詩は他者とのつながりをもたす。

② 耐え難い苦痛を我が事と考える

石牟礼道子の生涯は、水俣病という人災によって耐え難い嘆きを強いられた人びとの人生を、「わが」こととして考えることに費やされた(若松 2018: 15 - 16)。その内容についてはIV章で紹介するが、詩は、他人事を我が事として考える可能性を秘めている。

4. 詩が見出す永遠・普遍的なものの世界

4-1. メビウスの輪としての「詩」

「世界そのもの」は、私が生まれる前から存在し、私

の死後も存在し続ける。その世界の中に人間の命が誕生する。命に「私」という意識が芽生え、そこに「私が生きている世界」が立ち現れる。それは私によって理解・解釈された世界であり、目で見え、移ろう無常の世界である。ここではその世界を「表の世界」と表現する。

表には裏がある。表裏一体である。表の世界から裏の世界は見えず、あたかも存在していないかのように忘却されている。しかし、裏が表を支えている。この「裏の世界」が、永遠・普遍的なものであり、その一つに人の想いがある。

通常、私たちが交わす言葉で理解されているのは表の世界である。これに対して詩が表すのは、図1で言えば破線の枠で示された裏の世界である。詩人は裏の世界を言葉にして表の世界へと送り出す。このことを比喩的に表現すれば、詩によって世界は、表の世界の端と裏の世界の端が、ねじってつなげたメビウスの輪のように変容する。これにより表の世界に裏の世界が入り込む。これを視覚化すると「図1 メビウスの輪としての詩の構造」となる。

4-2. 永遠・普遍的なものの衰退

(1) 世界を理解する思考の枠組みの変容

古代から中世の社会では、世界は、物質的なもの、精神的なもの、形而上ならびに聖(霊)という3つの座標軸の下で理解されていた。そのため、そこではアイデアのような形而上学的なものや神のような存在・働きが実在すると考えられていた。しかし近代に入り世俗化が進展すると、徐々に形而上ならびに聖(霊)という次元(座標軸)が衰退し、19世紀にはニーチェの「神は死んだ」という言葉に象徴されるように、その次元の衰退は多くの人にとって明白なものとなった。それ以降、現代に至るまで、私たちは世界を物質的なものと精神的なものという2つの座標軸で理解するようになっている。

さらに、自然主義・科学主義が台頭するなか、歴史学者であるユヴァル・ノア・ハラリ(Harari, Y. N.)は『ホモ・デウス』の中で、近い将来、アルゴリズムの支配とデータ教とでもいうべき状況が到来するのではないかと予測している(Harari = 2018: 137, 189)。そうした時代では、近現代社会の基礎概念である自由意志や自由な個人などは虚構に過ぎないと見做される(Harari = 2018: 105, 132)。以上、述べてきたことを図に表すと図2となる。

(2) ポストモダン思想

ポストモダン思想は、例えば近代社会(モダン)が前

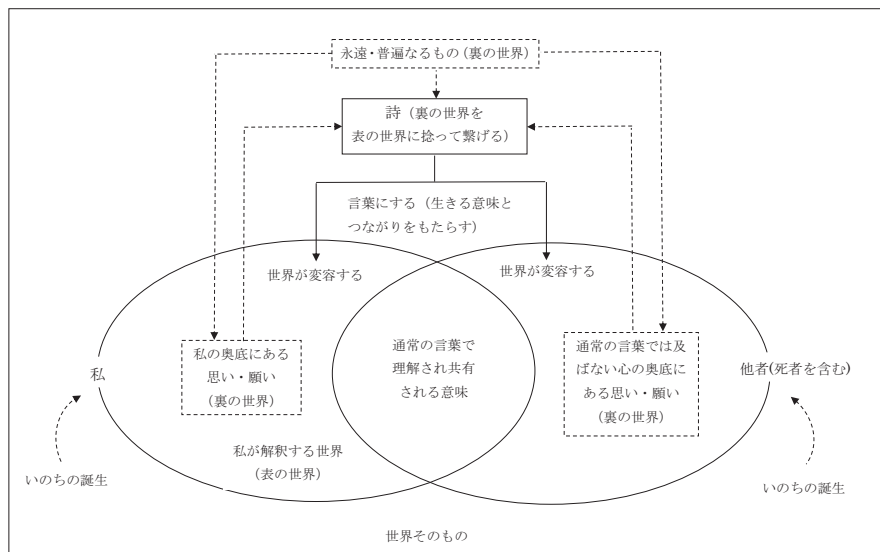


図 1：メビウスの輪としての詩の構造

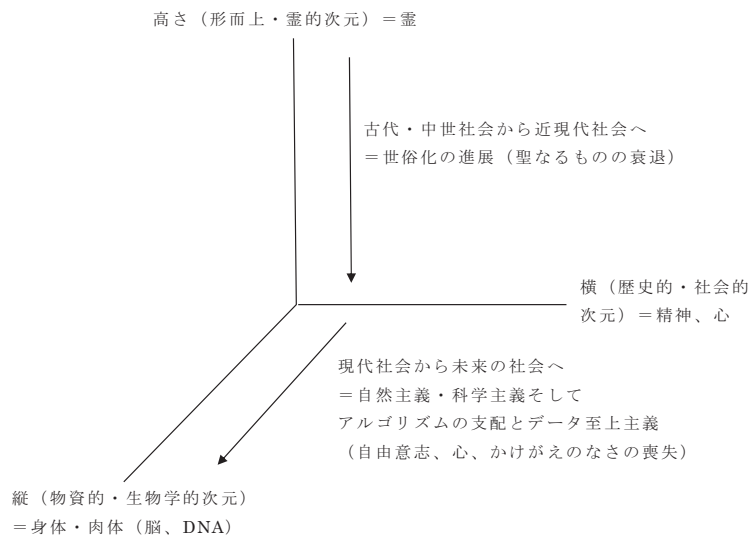


図 2：世界を理解する思考の枠組み

提としていた価値や真理は物語に過ぎないのであり、人間存在に内在するような究極的な根拠は存在しない、と考える (小林 2012: 1175)。ポストモダン思想に依拠するならば、ソーシャルワークの基盤である尊厳や社会正義も、相対的な価値の1つに過ぎない。それゆえ、「なぜ、尊厳があるといえるのか」、「なぜ、ソーシャルワークが提起する正義の内容が正義といえるのか」という問いに直接答えることはできない (児島 2020: 87 - 89)。

(3) 永遠・普遍的なものへの眼差し

上記に示したように、今日では、永遠・普遍的なもの衰退している。それは、図2に示した通り時代の趨勢でもある。そうした傾向に抗し、人間の尊厳をはじめ、人間の本性的なものに目を向け、それを言葉にしてきた宗教、哲学、そして文学である。

永遠・普遍的なものが衰退し、それが時代の趨勢となっているがゆえに、それに抗する思考が必要である。こうした思考の1つに詩がある。ここでは、その一つとして石牟礼道子の『苦海浄土』を取り上げる。

5. 『苦海浄土』という「詩」

5-1. 水俣病を生きた人たち

(1) 語りえぬ思い

水俣病は、神経の自由を著しく損ない、言葉を奪う病である。それゆえ、自らが背負った苦難を、十分に、あるいは、まったく、その苦しみや悲しみを語るができない (若松 2019-b: 20, 36)。坂本きよ子はその一人である。次の文章の語り手は、きよ子の母親である。

「きよ子は手も足もよじれてきて、手足が縄のようによじれて、わが身を縛っておりましたが、見るのも辛うして、

それがあなた、死にました年でしたが、桜の花の散ります頃に、私がちょっと留守をしりましたら、縁側に転げ出て、縁から落ちて、地面に這うとりましたです。たまがって駆け寄りましたら、かなわん指で、桜の花びらば拾おうとしりましたです。曲がった指で地面ににじりつけて、肘から血い出して、『おかしゅん、はなば』ちゅうて、花びらば指すとですもんね。花もあなた、かわいそうに、地面ににじりつけられて、

何の恨みも言わじゃった嫁入り前の娘が、たった一枚の花びらば拾うのが、望みでした」(石牟礼 2017: 13 - 14)

たった一枚の花びらを拾いたい。そうした望みを胸に秘め亡くなった人がいる。「坂本きよ子」というのは個人の名前であると共に、思いを語ることのないまま亡くなった無名の水俣病患者たちの「名前」でもある(若松 2019-b: 18 - 19)。

(2) 世界は美しい

『苦海浄土』で最初に書かれた「第三章 ゆき女きき書」に次の言葉がある。

「う、うち、は、く、口が、良う、も、もとら、ん、案じ、加え、て聴いて、はいよ、う、海の上、は、ほ、ほん、に、よかった」(石牟礼 2004: 149)

背負いきれないような苦難を背負ってもなお、世界は美しいと語る無名の人の言葉である。

5-2. 言葉を預かる

『苦海浄土』は、水俣病の患者たちが本当の語り手であって、自分はその言葉を預かっただけなのだ、という強い自覚が石牟礼にはある(若松 2019-b: 6)。彼女は、託された言葉を読んでいるのであって、本当の苦痛、苦難を抱えている人は、彼女の後ろにいる(若松 2019-b: 10)。ただし、そうした行為は代弁ではない。代弁者はしばしば誰かの名を借りて、自分のことを語ることがある。それは『苦海浄土』における石牟礼の態度からは、もっとも遠くにあるものである(若松 2019-b: 59 - 60)。

5-3. 『苦海浄土』における試み／問い

石牟礼は『苦海浄土』を「詩」と考えていた。彼女にとって詩とは、言葉になり得ないものを表現しようとする試みであり、同時に、自らの心情を語ることがないままに逝かねばならなかった者たちの声を、どうにか受け止めようとする営みであった(若松 2018: 11)。

語り得ない思いを胸に抱いたまま、「たった一枚の花びらば拾うのが、望みでした」という生涯を送った者の「声」になること、それが石牟礼の悲願であり、『苦海浄土』において試みられたことである(若松 2019-b: 18)。

人は心でつながるとき、他者に起こった出来事もわが事として考え始める。では、いかにして、心と心を通わすことができる日常を取り戻すことができるか。それが『苦海浄土』をはじめとした作品で、石牟礼が一貫して問うていることなのである(若松 2019-b: 77)。

5-4. 見出された地平と叡智

(1) 荘厳な光

石牟礼は『苦海浄土』を書いているとき、「荘厳されているように感じた」という。「荘厳」とは、もともとは仏教の言葉で、仏の光によって深く照らし出されることを意味する(若松 2019-b: 8)。『苦海浄土』の書き手は石牟礼道子だが、その語り手は、語ることを奪われた患者たちである。彼らの悲しみが世界を「荘厳」する。悲しみによって、苦しみと嘆きに満ちた世界に光がもたらされるのである(若松 2018: 88 - 89)。この光に人は深い慰めを感じる(若松 2018: 77 - 78)。

荘厳は大いなる闇を切り開き、人の心に近づこうとする聖なる衝動である(若松 2018: 88)。その光に人は慰めを感じるとともに、次に述べるような「許し」をも生み出す。そして、「美しさ」すら感じさせる。

(2) 許し

2人の水俣病患者の言葉に触れ、石牟礼は次のように書いている。

患者さんの杉本栄子さんと緒方正人さんからいろいろうかがううちに、あるとき「私たちはもうチツソを許します」という言葉が出てきました。私はハッとして「それはどういう意味でしょうか」と申し上げたら、「いままで仇ばとらんばと思ってきたけれど、人を憎むということは、体にも心にもようない。私たちは助からない病人で、これまでいろいろいじわるされたり、差別をされたり、さんざん辱められてきた。それで許しますという

ふうと考えれば、このうえ人を憎むという苦しみが少しでもとれるんじゃないか。それで全部引き受けます、私たちが」と。水俣病になったことも、途中の経過がいろいろございましたけれど、そういうのを、チツソのせいとか、あの人たちのせいであるしなきゃならないということ、その一番苦しみの深いところを、そっくり私たちが引き受けます、と。「許す代わりに、水俣病を全部私たちが背負うていきます」（石牟礼 2014：48 - 49）

ここで2人の患者は、かつて自分たちのいのちを脅かした存在を許そうとしている。若松英輔は「もし、平和と呼ぶべきものがあるなら、それは、けっして手を握ることはできないと思っていた人の手を握ることだということです。私はここに、今、世界を揺るがしているさまざま衝突を照らす一条の光があるように思われてなりません」（若松 2019-b：121）と述べている。

(3)「かなし」

昔の日本人は、悲し、哀しとだけでなく、「愛し」、「美し」と書いても「かなし」と読んだと言われている。若松英輔は、先の坂本きよ子の母親の語りについて、「この一文はそうしたかなしみの深みに読者を導いてくれます。熾烈なまでに悲しいのですが、どこまでも「愛しく」、そして「美しい」何かを読む者の心に残してくれる言葉であるように私には感じられます」と述べている（若松 2019-b：18）。

こうした美と悲しみについて石牟礼は次のように述べている。

「美とは悲しみです。悲しみがないと美は生まれえないと思う。意識するとしないとにかかわらず、体験するとしないとにかかわらず、背中合わせになっていると思います」（石牟礼 2014：162）

悲しみの底には、悲しみを生きる者を哀れと思い、深く憐憫を感じる心がある。悲しみとは、自分が愛する者を深く認識する契機であり、その経験の奥には底知れない美の世界が広がっている（若松 2019-b：45 - 46）。

6. 社会福祉学における「詩」の必要性

私たち一人ひとりに世界が立ち現れている。その世界において、思い、感じ、考え、意志することの総体が、いわゆる「心」である。図1に示されている通り、私た

ちは言葉や態度を通して、互いの心（世界）を共有（理解）する。図1で言えば重なっている部分である。しかし、それは部分的であり、図の重なっていないところに示されるように、他者には私に理解できない部分がある。

支援を必要としている人も支援する人も、「心ある存在」である。社会福祉の実践において、支援を必要としている人の心を感じとることや、心のこもった支援をすることが大切なことは言うまでもないが、人を「心ある存在」と理解することは、社会福祉事業の経営や社会福祉の政策を考える上でも必要不可欠な視点である。こうした社会福祉における「心」の重要性を確認した上で、社会福祉学における「詩」の必要性を述べる。それは、大別すれば3つある。

6-1. 人間の厚み・深み、尊さを感じる

小倉襄二は作家である高橋たか子の「いいことでもわるいことでも、人間のいちばん核心のところは、他人の眼にも届かないものであるらしい。……中略……人間のなかの本当という部分は、うっかり他人が見ればその眼がちりちりに爛れてしまうような、そんな性質のものなんだ、と私は思っている」という言葉を取り上げ、福祉の領域では高橋たか子のコトバはほとんどわかっていない、分かれようとしないうまま通過しているのではないかと指摘する。そして、福祉領域の人間理解について「浅薄な人間の理解、いたずらに専門的用語、心理・生理に分解した用語でくくりこむこと、その集合として、モザイクのように再構築して、それが福祉のパラダイムとしてとらえた人間だといってみる」（小倉 1996：24）と批判した。

人間は科学では捉えきれない側面や深み、あるいは尊さ（高さ）をもっている。それを表現するのが詩であり、詩を含む文学である。

6-2. 生きる意味（希望の光）

若松が言うように、詩は、時代が、また一人の人間が困難に直面したとき、ほのかな、しかし、たしかな光となってきた（若松 2019-b：28 - 29）。支援が必要な人の中には、困難に直面し、生きる意味、希望を失っている人もいる。そうした人にとって詩は、生きることを肯定する理由や生きる意味に気づかせてくれる可能性を秘めている。

6-3. 「福祉の問題」を「他人事ではなく我が事と捉える」

3つめは、人と人とのつながりを生み出すことである。このことについては、「福祉の問題」を「他人事ではなく我が事と捉える」という観点から説明する。

私たちは先に述べた「世界そのもの」を共有しながらも、それぞれに立ち現れている世界、すなわち、別の世界を生きている。「私に立ち現れている世界」は、自分の興味関心に基づき世界を認識しており、多くの人にとって「福祉の問題」は自分の関心ごとではない。そのため、我が事として捉えることは容易ではない。それでも詩は、次の2つのはたらきによって「福祉の問題」を「他人事ではなく我が事と捉える」ことを可能にする。

(1) 他者の奥底にある声(願い)を聴き、心を通わす

石牟礼が示したように、詩は、苦痛、苦難の中、言葉を奪われている人たちの「心の奥底にある思い」を言葉にする。それを聴く(読む)ことにより、人は心でつながり、他者に起こった出来事も我が事として考え始める。こうして「福祉の問題」を「他人事ではなく我が事として捉える」可能性に開かれる。

(2) 真実・叡智を共有する

「表の世界」では、「私は私、他者は他者」であり、それぞれが別の世界を生きている。しかし、詩は「裏の世界」を露わにする。その世界には、世界の美しさ、許し、「かなし」といった真実・叡智が示される。そこで示されることは、私、他者、自然の「つながり」である。この「つながり」への目覚めが、「福祉の問題」を「他人事ではなく我が事として捉える」ことを可能にする。

7. おわりに

本稿では若松英輔『詩と出会う 詩と生きる』を援用し、そこから「図1 メビウスの輪としての詩の構造」を示し、詩は、①人間の厚み・深み、尊さを感じることができる、②生きる意味(希望の光)となり得る、③「福祉の問題」を「他人事ではなく我が事と捉える」ことを可能にすることを導き出した。それを本稿における「社会福祉学に詩は必要である」という主張の理論的根拠とした。そして、その構造の具体的内容を表すものとして石牟礼道子『苦海浄土』を取り上げ、社会福祉学に詩は必要であることを明らかにした。とはいえ、ここで取り上げたのは『苦海浄土』だけで、「社会福祉学に詩は必要である」と結論付けることはできない。よって今後の課題は、他の詩そして小説などの文学作品を通して、本稿の主張の妥当性を確認することである。

文献

- 荒井祐樹(2011)『障害と文学—「しのめ」から「青い芝の会」へ』現代書館。
- ブッシュ孝子『ブッシュ孝子全詩集—暗やみの中で一人枕をぬらす夜は』新泉社。
- Bremner, R. H. (1996) *Giving: Charity and Philanthropy in History*, Transaction Publishers. (= 2003, 西尾祐吾, 栗栖照雄, 得津慎子他訳『社会福祉の歴史—文学を通してみた他者援助』相川書房.)
- 遠藤興一(2019)「近代文学に描かれた福祉の風景—都市と農村における歴史的諸相(清水浩一教授退任記念論文集)」『明治学院大学社会学・社会福祉学研究』(152), 49-161.
- Harari, Y. N. (2015) *HOMO DEUS: A Brief History of Tomorrow*, Harper; Illustrated. (= 2018, 柴田裕之訳『ホモ・デウス—テクノロジーとサピエンスの未来 下』河出書房新書.)
- 石牟礼道子(2004)『新装版 苦海浄土—わが水俣病』講談社。
- 石牟礼道子(2014)『花の億土へ』藤原書店。
- 石牟礼道子(2017)『花びら供養』平凡社
- 岩崎 航(2013)『点滴ポール—生き抜くという旗印』ナナロク社
- 小林康夫(2012)「ポストモダン」大澤真幸, 吉見俊哉, 鷲田清一編『現代社会学事典』弘文堂, 1174-1175.
- 児島亜紀子(2020)「ソーシャルワークにおける尊厳概念をめぐって」日本社会福祉学会編『社会福祉学』Vol. 60-4, 86-89.
- 小山聡子(2014)「差別意識に働きかける社会福祉教育実践—文学テキストに分け入る他者理解教育の試みを通して—」『社会福祉研究』第121号, 60-67.
- 小倉襄二(1996)『福祉の深層—社会問題研究からのメッセージ』法律文化社。
- 小倉襄二(2006)「総論 老後保障・福祉を学ぶために」小倉襄二, 浅野 仁編『新版 老後保障を学ぶ人のために』世界思想社, 1-39.
- 小泉純一(2000)「文学と福祉の接点—ディケンズが『オリバー・ツイスト』に託したもの—」『日本福祉大学社会福祉論集』(102), 75-91.
- 内田 樹(2007)『村上春樹にご用心』アルテスパブリッシング。
- 若松英輔(2018)『常世の花—石牟礼道子』亜紀書店。
- 若松英輔(2019-a)『詩と出会う 詩と生きる』NHK出版。
- 若松英輔(2019-b)『NHK「100分de名著」ブックス 石牟礼道子 苦海浄土—悲しみのなかの真実』NHK出版。
- 若松英輔(2020)「魂のうた—詩人ブッシュ孝子の境涯」ブッシュ孝子『ブッシュ孝子全詩集—暗やみの中で一人枕をぬらす夜は』新泉社, 148 - 162.